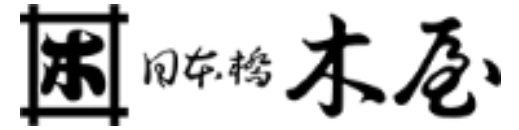




## <加藤 俊男氏の略歴>

- ・寛政四年(1792年)創業以来**八代目当主**
- ・昭和25年3月: 早稲田大学理工学部**応用金属科(現材料工学科)卒**
- ・昭和25年4月: 株式会社木屋入社
- ・平成4年11月: 社長就任
- ・平成21年8月: 会長就任

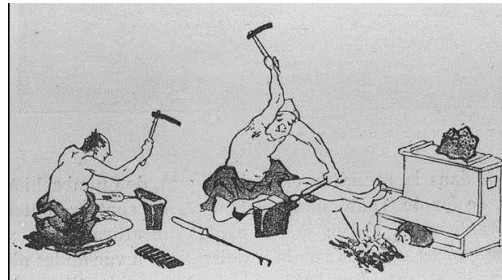


## <講演内容> 日本橋木屋の創業から現在まで: 1792~2016

- ・木屋はよく切れてしかも**錆びない包丁**を目指している
  - \* 鉄(鋼)は錆びやすいが、これは本来の自然の姿(酸化鉄)に戻りたいから
  - \* 鋼にクロムを添加したステンレス鋼は、従来“錆びないが切れない”とされてきた

## ■ 木屋の歴史

- ・寛政四年、初代加藤伊助が本家の木屋から「のれんわけ」し、独立した店舗を持つことを許される
- ・本家の木屋の祖**初代林九兵衛**は、**大阪**で豊臣家の薬種商としての御用商人だったが、家康が江戸へ移るのを見て当主の**弟が江戸へ下り**、大阪と分かれて店を持ったので、**姓の林を二つに分けて「木屋」を称した**
- ・本家木屋には「暖簾分けは許すが、本家と同じ商品を扱うことは許されない」というしきたりがあったようでその為**打刃物を扱うようになった**と言われている。(注: 打物とは鋳物以外の鉄製品)
- ・「**熙代勝覧**」(きだいしょうらん)
  - \* 文化二年(1805年)頃の江戸の今川橋から日本橋までの大通りを俯瞰した絵巻物
  - \* 普請中の木屋幸七店を含め、四軒の木屋が並んでいる
- ・北斎漫画「**仕事中の鍛冶屋**」
  - \* ふいごの上にみかんを載せて感謝
  - \* “ふいご祭り”の時はわざわざ紀州からみかんを取り寄せた





## ■ 木屋の歴史～続き

・文政七年(1824年)刊行の「江戸買物独案内」(ガイドブック)には、小間物問屋と打物(打刃物)問屋との二つの木屋伊助の広告が掲載されている。

\* 本店の称号は丸に木の印なので、本店と同じ小間物については遠慮して井桁に木の印(井筒木)を用い、本家の扱わない打物については本家と同じ丸に木の印を使っていた

\* 「十組」というのは一種のギルド組織で、丸に“う”の字は上方の打物を独占的に扱う十組に属していることを示す

\* 当時良い製品は関西中心で作られたので、「下り物」が上等、関東以北は「地の物」と呼ばれていた⇒「下らない」の語源

・明治二十三年(1890年)刊行の「東京買物独案内」にも打物木屋の広告が載っている

\* この加藤伊輔が四代目当主

\* 当時の店の役職序列: 当主(社長) > 大番頭(支配人) > 番頭 > 手代 > 若い衆 > 丁稚  
(上から三番目の番頭までが家から店に通うが、それ以下は皆店に住み込み)

・昭和七年(1932年)それまでの卸に加えて小売りをスタート@三越本店の隣

\* この建物は3階建てに見えるが実は2階建て(∵木造は2階建てまでしか許可されず)

\* 戦時中に隣接する三越を守るため、疎開作業で破壊された

## ■ 木屋入社後

・大学卒業後、入退院を繰り返していた後継者の兄のスペアとして木屋に入社

・入ったからには、店の仕事は全て覚えようと、売り場に立った

⇒ お客に一番多く聞かれたのが「よく切れるステンレス包丁はないか」との要望

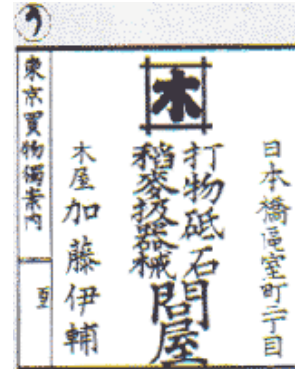
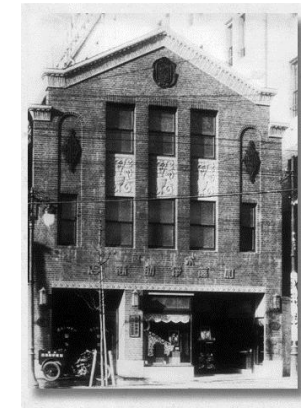
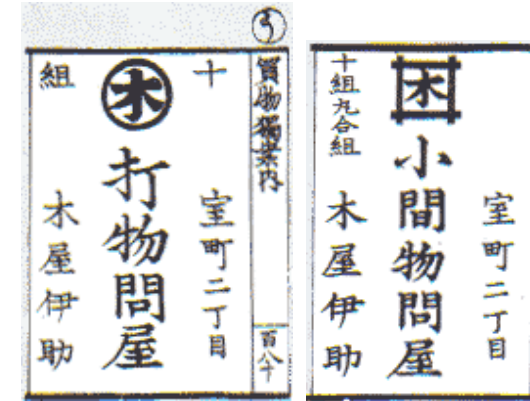
⇒ 初めは当時の常識通り「切れ味の良い庖丁をお求めでしたら、やはり鋼製ですね」と返答

⇒ 早稲田で学んだ知識を生かせないか、と参考書「晩近鐵鋼及特殊鋼」を引っ張り出し製鋼各社の鋼材を探した⇒ オーストリアポラー社のエーデルワイス鋼に出会う

⇒ それを村上さんの工場(東京村定牛刀工場)にて国産初の硬くて錆びないステンレス包丁に  
(当初はフェニックス=不死鳥の刻印)

\* ステンレス=鉄にクロムが13%以上含まれているもの

・百貨店の購買部長を説得するため“切れ味”の数値化⇒ 一刃物店として初めて“本多式切れ味試験機”を導入





## <Q & A / Comment>

ホスト: 永井 真未(銀座越後屋、九代目当主の姉)

\* 越後屋: 初代永井長助が雪深い越後高田から江戸へ丁稚奉公に上がり、延期の明けた後の宝暦5年(1755年)に京橋伝馬町にて藍染屋を創業。その後商いも太物(木綿物)から呉服(絹物)へと広げ、2代目甚右衛門の時に銀座に店舗を移し、今日まで同じ場所で商いを続けている老舗中の老舗。

Q: 木屋さんも200年以上続いておられるが、家訓とかはあるのでしょうか?

また日本橋本店が移転(三越ライオン口前⇒コレド室町)しているが、日本橋はどういった街になってほしいですか?(最近どこも同じようなビルばかりになって、日本橋らしさがなくなって来たのでは?)

A: 戦後作ったものはあるが、先祖伝来の家訓は聞いたことがない。日本橋のビルについては、こればかりはしょうがない。もし嫌なら自分で土地を買い取って店を続けるしかないが…。

Q: 「ふいご祭り」になぜ“みかん”が付き物なのか?

A: 鉄を叩く時に、ふいごで起こした火で熱した鉄がみかん色になれば適温となるから

Q: 打物十組問屋の中で今も続けているのは他に1社ぐらいとのことだが、200年以上続く秘訣は?

A: 他所は何となく止めていった。私も90歳になるがなぜと言われても…、死なないから、元気に暮らしている。不老不死の秘薬があるわけではない

Q: 御社は直営の工場を持って製造販売しているのか、それとも商社(セレクトショップ)的に仕入れて販売しているだけなのか? もし目利きとして仕入れて売っている場合、どうやって他の店と差別化しているのか?

A: 実に良い質問をされました。以前直営工場の下請けを持っていたが、これが親会社の木屋に頼って、競馬に入り浸ったりしたものだからスツパリと切って、それからは良い下請けを探して委託・外注している。(材料をウチから支給し、加工法を指示)

Q: たくさんのお客さんと接する中で印象に残っていることは?

A: 入社当時は店頭に立っていたが、現在は店頭立たないので思い出せない。今は下請けに作らせる方に注力している。ただ、今も西武百貨店の部長のことは強く印象に残っている。

## <感想>

刃物を扱っているのに、なぜ「木屋」なのか、とか流石200年以上続いた老舗だけに、歴史的なトリビア満載のお話でしたが、肝心のビジネスモデルは最後のQ&Aでやっとスッキリ。要は刃物界のアップルだったんですね。それにしても、もうすぐ卒寿を迎えられる加藤さんが、パワポをあやつり熱く語る“今日も会長”な姿に感服です。



呉服の老舗  
越後屋